

伝統的建物の再生と新たな価値の創造

—千葉県香取市佐原 町並み再生プロジェクト—

建築学会正会員 郡 裕美

建築学会正会員 遠藤敏也

一級建築士事務所 スタジオ宙

千葉県香取市佐原が重要伝統的建造物群保存地区に指定された1996年より、私たちは、佐原の町並みの保存修復に関わる数々の設計業務を遂行してきた。1999年に完成した「しゅはり」から、東北大震災の被災地にもなった佐原の復興拠点として、一昨年に完成した「いなえ」まで、その間に私たちが手がけた物件は延べ15件、現在も1件が進行中である。

それらの設計を進める中で私たちが心がけてきたことは、「作らないで創ること」。もちろん、歴史的町並みの修復は単純な修繕とは違い、設計者に「作る」ことが求められる。原型をとどめないほど老朽化した古家では類似事例の研究をし、想像力を働かせながら歴史の形を再現し、火事で消失して歯抜けになった場所では隣接建物の調査をし、かつてそこにあった古建物に思いを馳せながら「町並み保存」の視点で新築の建物も設計した。その折、私たちはなるべく「作らないこと」つまり、設計者が透明になることを目指してきた。

しかし、町並み保存の目的は歴史の再現ではなく、それを通して私たちの生活がより文化的で豊かになることである。そこで、「創ること」が私たちの仕事だと位置つけた。それは、ハードとしての建築をこえたソフトとしての建築、すなわち人々の心に響く「空間を創る」ことである。

コンセプト1. 空間としての町並み修復。

町並みの修復は、建物と町との接点を活性化することだと信じ、かつてそこにあった町のにぎわい、建物と人との有機的な関係を修復することを目指し、様々な取り組みをしてきた。

A. 軒下空間、公私の中間領域を再生する。

佐原の町並みの特徴である軒下空間の再生により、街路と内部空間との柔らかい関係性を取り戻した。外からは、内部の様子が見え隠れし、内からは町の様子が楽しめる。



いなえ母屋：格子とガラス戸で軒下空間を作った。

B. 町に奥行きを生み出す。

軒下から土間、中庭へのつながりを考慮し、通りから建物内への流れを感じる、奥行きのある町並みを創り出した。

C. 中庭を解放する提案

中庭を町並みの延長として開放し、市民・観光客が憩える場としつつ、普段目に触れない土蔵などの付属家と町とのつながりも創出した。



いなえ外観：中庭を作り、通りから見通せるようにした。

(比較: 他の修復事例)



ファサードに格子戸を設けているが、道空間に対して閉鎖的で奥行きが感じられない。

町並み保存を面的修復にとどめると、本来の意味での町並み再生は成功しないと思う。

(参考: 佐原の古写真)



凹凸のある町並み。深い軒が道行く人を優しく迎える。祭りの時は道が舞台となり、建物と町がつながり活気があった。



コンセプト2. 伝統を現代に生かす。

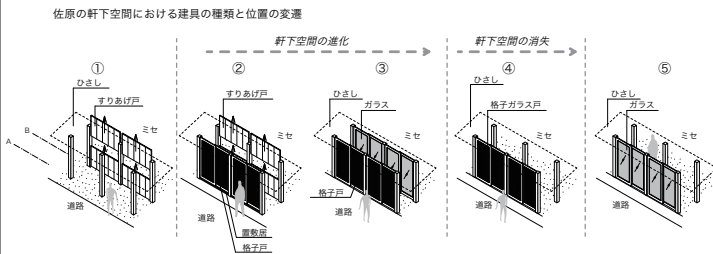
伝統的な建築の形と機能の関係に注目し、それらを現代の機能にすりあわせ、建築が形骸化した文化財にならないよう、様々な試みをしてきた。

1. 歴史を現代に翻訳する。

建築は関係性を司る装置でもある。伝統的な建築の持っていた空間性を現代のボキャブラリーに置き換えることで、歴史と現在をつなげる。

2. 歴史の重層性を視覚化する。

明治から昭和に至る増改築のプロセスを整理し、歴史の重層性を視覚化し、歴史と未来をつなげる。



©T.SOBAJIMA

しゅはり: 現代の格子としてポリカの建具で半透明製を生み出した。



↑しゅはり: 強化ガラスで軒下空間を作った。
参考: 置き敷居+格子の伝統的な軒下空間。→

コンセプト3. 歴史を楽しむ仕掛けをつくる。

歴史、記憶など時間の経過を楽しむ視点を持つことで、町並み修復が未来へとつながる新しい価値の創造行為となって欲しいと願い、様々な試みをしてきた。

1. そこにある美しさを発見する。

時間を経過したものがもつ独特の美しさを発見する仕掛けを作る。

2. 記憶を形にする。

建築は、思い出を残す媒体になるチカラをもっている。記憶を大切に空間設計をする。



東日本大震災の被災地である佐原。落下した古瓦を中庭に積んでオブジェとし、古い土蔵の基礎石を踏み石とした。



↑しえと: 中庭の古井戸と再生した味噌蔵を光の作品として楽しむ仕掛け。

→下仲町の蔵: アクリル硝子で立体窓をつくり、蔵の間と光を楽しむ仕掛けとした。



©T.SOBAJIMA

佐原での一連の仕事に対して、内外の新聞や建築雑誌等（資料：掲載誌抜粋資料）にも多く紹介され、地元の方々をはじめ、訪れる観光客の方々にも高い評価を得ている。また、「しゅはり」ならびに「八坂の家」は千葉県建築文化賞に、「しえと」は2012年アルカシア建築賞、保存再生部門のゴールドメダルなど、数々の建築賞をいただいた。

スタジオ宙一級建築士事務所 180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町1-27-3-701
tel 0422-20-5071 fax 0422-20-5072 myu@studio-myu.com

歴史的建物の保存再生 業績一覧

～千葉県香取市佐原 町並み再生プロジェクト～

これらは、私たちが佐原で行ってきた伝統的な建物の改修設計である。ほとんどの建物は、時代と共に何度も改装を重ねられた結果、元々の形が分からなくなっていた。そこで、佐原の町を踏査し、伝統的な建築の形を探し出し、そこにあったであろう町と建物、ウチとソト、公私の関係性を再解釈し、個別の建物に当てはめていった。同時に、各々の建物の機能、施主の要望、現代の材料や工法、設備や構造をそこに重ねていった。伝統のかたちを念頭に置きながらも、未来につながる建築を設計することを心がけた。



① しゅはり [1999]



改修前、軒は切られ、母屋は2つの店舗に分断されていた。改装にあたって元々の構造、間取りを調査し、その空間性を生かしながら町に開かれた不動産店舗の提案をした。また、表には伝統的な格子戸の代わりに、看板も兼用する透明な強化ガラスを設けた。これは、風景を映し込みながら内部の様子を伝え、格子の半透明な性格をもつ。伝統を現代に翻訳しつつ、柔らかな境界を持つ設計とした。

② 小森家 洋館 [2004]



改修前、正面の建具はアルミサッシに変えられ、欄間のステンドグラスは撤去され、2階の欄干は崩れていた。そこで、古写真を参照しながら、建具、ステンドグラス、ファサードの修復をした。

③ いなえ（西ノ宮）母屋 [2007]



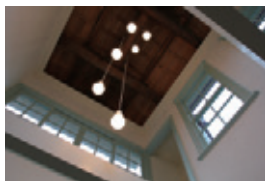
文具店として使われていた母屋の軒は切られて看板建築となり、階高もかさ上げされていた。度重なる改装と増築の結果、裏に控える5軒の建物群と不可分に絡み合っていた。増築部分を切り離し、階高を下げ、軒を復元し、構造補強し、表に格子戸を作った。

④ いなえ（玉澤家）母屋 [2008]



もともと乳母車店であったこの商家は、軒が切られて看板建築となっていたため、軒を復元し、古写真を参照しながらファサードを復元した。裏の中庭とのつながりを感じられるように、透明ガラスの建具を用いた。

⑤ いなえ（西ノ宮）洋館 [2010]



洋館は、母屋、増築部、蔵と絡み合い、もとの形が分からない程に老朽化が進み、小屋組をのぞき、全て新しくする必要があった。柱や梁のほぞ穴や、類似の洋館の古写真を参照しながら、洋館を再建した。保存された小屋伏を楽しめるよう、天井は現しとした。

⑥ いなえ（西ノ宮）蔵 [2010]



著しく老朽化していた蔵は、洋館と接続されており、そのままでは改修が難しい為、正屋をして洋館と離した。その後、基礎をやり直し、構造補強し、壁と屋根の修復をした。ギャラリー空間として天井の高い蔵の骨組みを楽しむ為、天井から古い蔵にあったトタン製の鬼瓦を吊るした。

⑦ いなえ（西ノ宮）倉庫 [2012]



倉庫は、著しく老朽化していた上に、母屋や蔵など他の付属屋と分離しがたくなっていたため小屋組以外、ほとんど全て作り直すことになった。母屋と渡り廊下でつなぎ、天井の高い開放的なカフェ空間へと生まれ変わった。

⑧ いなえ（西ノ宮）中庭 [2012]



母屋、洋館、蔵、倉庫などを分節し、その隙間の屋根を壊すことで中庭を生み出した。時代も建築スタイルもまちまちな建物が乱立する不思議な建物配置に、敢えて整合性を求めず、折り重なった時間層を感じられるような空間構成とした。苔むした土蔵の基礎石を敷き、被災地である佐原の、震災で落ちた古瓦を使ったオブジェを置き、歴史と対話できる場を提案した。

⑨ 下中町 土蔵 [2002]



土蔵は、屋でも暗闇に包まれていた。唯一ある窓から差し込む光を楽しむ仕掛けを持つギャラリーを提案した。絹目模様のアクリル硝子の箱を、既存窓の内側に設置すると、箱の表皮には外の景色や窓の鉄格子の影が映り込み、生き物のように息づく。「光の箱」は開閉可能な換気窓でもあり、夜は照明器具となる。

⑩ カフェ しえと [2004]



改装前の母屋は、通りに迫った腰板付のガラスがあり、閉鎖的だった。そこで、通りに面して格子戸とガラス戸を新設し、緩衝領域を設けた。すると、表の気配を感じながらも、くつろげるカフェが生まれた。台所の床を壊して通り土間を作ると、町と建物が中庭までつながって開放感のある店内となった。

⑪ しえと 味噌蔵 [2006]



カフェの中庭に立つ味噌蔵は、用途を限定しない自由な空間にしたいというオーナーの意向に答えて、何でもできる舞台のような場所を提案した。庭の伊勢砂利を部屋の中に敷き込み、浮かんだ床は墨染めとした。間接照明で浮かび上がった床は、時空をこえた異次元のように感じられる。

⑫ しえと 中庭 [2006]



ここは、中庭のまわりに母屋、蔵、味噌蔵という伝統的な住棟配置が残る貴重な例であった。そこで、地元の人や観光客が町並みの延長として楽しめるよう、庭を開放する提案をした。母屋に中庭を楽しむ縁側とベンチも作った。伸びすぎたシュロはそのままにし、古井戸の周りにゴロタ石を敷き、古の記憶の時空が広がっていく庭の景色をつくった。

⑬ 八坂の家（山村家） [2003]



改装にあたって、佐原の伝統的な町家の軒下空間の構成要素である格子戸に加えて、その内側にガラス戸を新設し、新たに軒下空間を作った。その結果、通りと建物との柔らかな関係が生まれた。現在、1階はギャラリーとして使われている。

⑭ 本橋元町家 [2003]



表の建具は、検討を重ねた結果、繊細な格子とした。現存する古写真では、腰板付きのガラス戸になっているが、調査の結果、もともとこの内側に建具があったことがわかり、ここでも、格子戸+ガラス戸で町と建物を柔らかくつないだ。現在、店とつながって、中庭を楽しむ飲食店を設計中である。

⑮ 佐原千与福 [2005]



火事で消失した奈良屋跡は空き地となっており、小野川の町並みはとぎれていた。そこに、建主からも行政からも、町並みにあわせた建物の新築が望まれた。そこで周囲の軒高や屋根勾配などを調査し、この地にふさわしい蔵のレストランを新築した。一方、空間構成は現代のニーズに応えられる様に、伝統にとらわれない構造や工法を選び、伝統と現在の共存を心がけた。

<事例紹介 1 >

しゅはり

空間としての町並み再生

明治後期の商家を不動産店として甦らせる。

郡 裕美+遠藤 敏也 / スタジオ宙一級建築士事務所

空間としての町並み再生

しゅはり

明治後期の古家を、不動産店舗として甦らせる。



▲ ファサード昼景

この建物は佐原の景観形成地区に位置する。古い町家を店舗に改装し、訪れる人々にその空間を体験してもらうことで、佐原の町並み整備の拠点にしたいという、不動産業を営む店主の要望により計画された。

軒下のインフォメーション空間、ミセの打合せ空間、土間を生かした店舗空間など、改装前の町家の「通り」と「内部空間」との柔らかい「関係性」そのものを再生する改装計画とした。町並み整備を突き詰めると、ファサードはもとより、ファサードを透かして見えるインテリアまで含めた、総合的な計画が必要である。また、ガラススクリーンを暖簾のように設置して、「通り」と「軒下空間」とを柔らかく仕切るなど、伝統的なデザインインキャブラリーを、現代の素材で再生する事を試みた。



▲ 軒下空間には、不動産チラシ入れ、ガラススクリーン（現代の暖簾）、アクリル製の袖看板をデザインし、通行く人とのコミュニケーション空間とした。

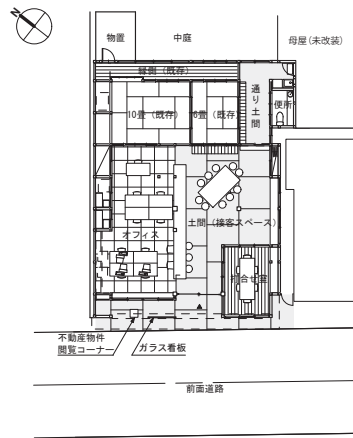


▲ 置き敷居+格子の伝統的な軒下空間



©T.SOBAJIMA

▲ ファサード夜景。通りから見えるインテリアも、建築のファサードと一体となり、町並みを形づくる。



改装部分平面図 1:150



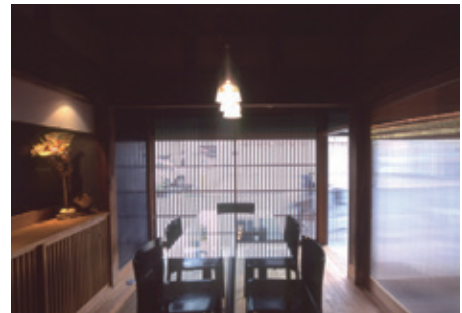
▲ 置り上げ戸のあった入口には、大きな透明ガラスの扉を設置して、音・熱環境を確保しつつ、「通り」と内部空間との連続性を持たせた。



▲ 土間（接客室）の奥には、既存の和室を残し、伝統的な町家のインテリアが、店舗を訪れた人や、通行く人にも認識できる。



▲ 土間（接客スペース）から、店内、通りを見通す。通りを行き来する人、町の気配が感じられるオフィススペース。この空間に合わせてシンプルな照明器具を製作した。



▲ ミセにあたる空間は、打合せ室とした。通りとは格子戸で、店舗内部とはポリカウチンカーポの襦戸で、柔らかに仕切られる。祭りの時は、山車を見物する為の高空間として開放される。



▲ 「通り土間」より既存の和室、店内、「通り」を見通す。「通り」から中庭まで連続する空間

年2回催される祭りの時には、「通り」は山車の舞台となり、町家はそれを眺める観客席となる。「通り」と町家との結びつきが伝統的行事の中に生きている。この改装計画では、「通り」と「内部空間」との連続性を意識して、単なるファサード整備にとどまらない町並み整備のあり方を提案した。



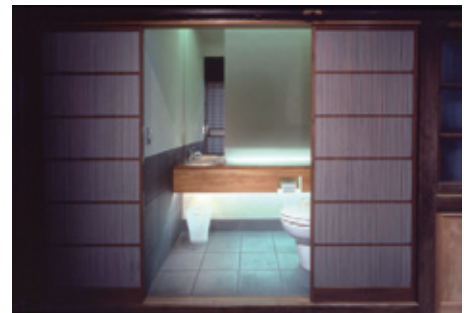
▲ 佐原の祭りの様子



▲ 土間越しに見る祭り（伝統的の家屋の例）



▲ 見物場となる土間（伝統的の家屋の例）



▲ 既存の貫戸を利用したトイレの間仕切り

<事例紹介 2 >

しえと

創造的古家再生

明治後期の古家、土蔵、味噌蔵、中庭を、カフェ、ギャラリーとして甦らせる。

郡 裕美+遠藤 敏也 / スタジオ宙一級建築士事務所



この古家をはじめ訪れてから、はや十年。小規模の修景工事を含め、四期に亘る工事が、ようやく一段落を迎えた。明治後期に商家として建てられた母屋は廃屋同然で、中庭や土蔵も荒れており、味噌蔵に至っては、いつ倒壊してもおかしくない有様だった。しかしその殺伐とした風景の中に、妙な懐かしさや歴史の流れが重なって見え、まるで白昼夢の時間層に入り込んだような感覚を覚えた。結局その時のイメージが、中庭のデザインや味噌蔵の浮遊した黒い床などの発想の源となった。

景観形成地区に指定されている佐原にとって、この商家は、中庭を中心に母屋、蔵、味噌蔵という、伝統的な住棟配置が残る、特に貴重な例であった。したがって、個々の建物の再生やファサードのデザインだけでなく、建築群としての存在、奥行きのある町並みを常に意識しながら計画を進める必要があった。母屋は、観光客や地元の人たちを、歴史に誘うカフェとして蘇らせた。そして中庭は、裏木戸から誰でも自由に入出りできるようにし、町並みの延長として佐原散策のスポットとなった。

新築をする場合、敷地を読むことから始める。このケースも同様、時間の堆積物に覆われた空間を読み取ることから始めた。そこから、残すべきもの、手直しするものを見極め、そこに、新しい用途や機能を含めた、「現代」というフィルターを重ねていく。しかし、歴史的町並みの再生という本質を見失わないためには、そのフィルターは可能な限り薄くする必要があった。そこで発見された空間の意味や美しさ、歴史の記憶を最小限の要素を用いて、強化し、変成しながら、見え方、用途を変える。「作らずに創る」私たちの今回の最大のテーマとなった。



↑カフェから表通りを見る!

↓カフェ入り口から土間、中庭を見通す

創造的古家再生 カフェ しえと

明治後期の古家を、カフェ、ギャラリーとして甦らせる。



改装前の母屋外観。



改装前の母屋内観

母屋 (カフェ)

通りに面して、格子戸とガラス戸を新設し空気層を設けた。すると、表の風配を感じつつ、くつろげるカフェが生まれた。台所の床を壊して通り土間を作ると、室内と中庭がつながって開放感のある店内となった。

実は、この建物には、もともと格子戸も通り土間も存在しなかった。しかし、これらはこの地方の伝統的な建築要素に着想を得て作ったため、建物と町並みにしっくり馴染み、あたかも昔からそこにあったかのような錯覚を覚える。



改装後外観





古の記憶



改装前平面図 S:1/400



改装後平面図 S:1/400



←改装前の中庭



↑中庭から土蔵を見る

カフェしえと 中庭

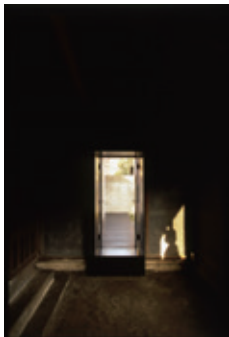
伸びすぎたシュロは、あえてそのままにして時間に取り残された様相を残した。また、古井戸の周りにゴロタ石を敷き、井戸が源になって記憶の時空が広がっていく庭の景色をつくった。そして、井戸の中にゆっくり点滅する照明を施し、地底をのぞく仕掛けを作った。中庭は、古の記憶を楽しむ場となった。中庭は、地元の人や観光客に開放されており、町並みの延長として楽しめる。建物を保存修復するだけでなく、中庭の空気を再生することにより、町は、その奥行きを増した。

↓中庭夜景 左は味噌蔵、右奥に母屋(カフ)、手前に古井戸



↑母屋に中庭を楽しむ縁側とベンチを作った。





↑土蔵から増築部への出入口

闇と光

土蔵（ギャラリー／週末住宅）

土蔵は、昼でも暗闇に包まれている。そこで光を生け捕りにする仕組みを考えた。紙やすりで細目模様をつけたアクリル硝子の箱を作り、既存窓の内側に設置した。箱の表皮には外の景色や窓の鉄格子の影が映り込み、光は刻々とその色を変え、生き物のように息づく。「光の箱」は開閉可能な換気室でもあり、夜は照明器具となる。

また、この土蔵に隣接して水回りを備えた小屋を新築した。こちらは、内外装共に白で仕上げて光溢れる場所にし、二つの建物を黒い鏡音開きの扉で結んだ。光と闇、日常と非日常、二つの対比を楽しみながら過ごす週末住宅兼ギャラリーとなった。

味噌蔵（カフェの隠れ）

■の伊勢砂利を部屋の中に敷き込み、床を作った。間接照明で浮かび上がった床は、舞台のように様々な可能性を秘めた場となった。

↓増築の小屋の内部



↓土蔵の外観、左に見える白い小屋が増築部。



↑土蔵 階 内観、光の箱
←土蔵 8階から中庭を見る



©T.SOBAJIMA



←味噌蔵から中庭を見る。
→味噌蔵の床は畳、弁柄、膠で張め、床暖房を施した。

<事例紹介3>

いなえ

折り重なる歴史の時間を楽しむ

明治後期の商家2軒、土蔵、洋館、昭和の倉庫を蘇らせる。

東日本大震災 復興拠点 地域活性化施設

飲食店、物販店、ギャラリー、中庭

郡 裕美+遠藤 敏也 / スタジオ宙一級建築士事務所

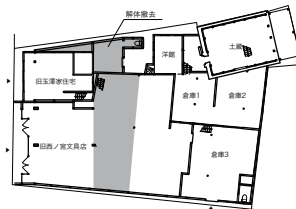
初めてそこを訪れたとき、そこには伝統のかたちの片鱗も感じられなかった。通りに面した2軒の町家は「看板建築」と化し、度重なる増改築の結果、裏にあった洋館、土蔵、倉と輪郭さえ不明ほど複雑に絡み合い、中庭は大屋根で覆われて巨大な内部空間をかたち作り、文具店の店舗兼倉庫として使用されていた。

今回の改修工事は、3期に分けられる。最初の2期は、町並み再生事業として、外観と構造の修復が大きな部分を占めた。しかし、古写真が残っていた町家の外観以外は原型がほとんどわからず、柱に残されたほぞの跡から構造を推察し、他の類似建物に手がかりを求めると、考古学的な取り組みで修復設計を進めた。また、各棟とも老朽化がかなり進んでおり、基礎、構造、屋根、内外装すべてに手を入れる必要があった。

中庭部分にかかっていた大屋根を取り除いた後は、様々な建築様式の建物が脈絡なく建っている不思議な住棟配置が現れた。無事2期工事がおわり、通り沿いの町家2軒、洋館、土蔵の修復を終えた所で、東日本大震災に見舞われた。

一時は完成が危ぶまれたが、震災後、町に復興の拠点を作ろうという話を持ち上がり、甘味処、ギャラリー、佐原特産の物販店として蘇えることになった。それから、町並み修復という設計から、震災復興拠点の設計という課題を与えられることになった。

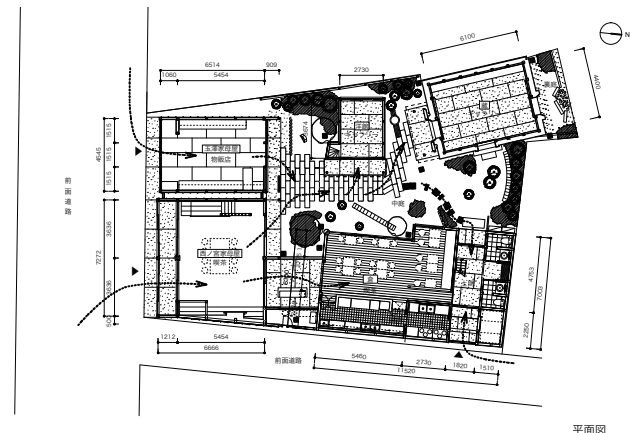
佐原の歴史的な町並み、町の記憶、場の記憶を大切にしながら、その重なり合った時間の不整合な感じや、遺構のイメージを大切にしながら空間全体を再構築していった。震災で落下した古瓦のオブジェや土蔵の基礎石でつくった石畳、もともとあった板金製の古い鬼瓦や錆びたタン波板、腐蝕感をあえて残す裏庭など、「いなえ」のあちこちに場所の記憶をちりばめ、歴史を感じる風景を作った。2007年から5年に渡る工事を、昨年ようやく終了することができた。折り重なる歴史の時間を内包することの場所から、佐原の新しい歴史が始まることを願う。



改修第一期中間図



改修第二期中間図



平面図

町並みの一部として楽しめるように、回遊できるプランにした。

「いなえ」は、西ノ宮文具店と玉澤家住宅、その裏にあった土蔵と洋館など、明治から昭和初期に建設または移築された5棟の建物を、伝統的な街並みの一部として再生したものである。香取街道沿いの「伝統的建造物群保存地区」に位置する。

改修前

通り沿いの町家2軒の軒は切られ、階高もかさ上げされており、洋館、土蔵、倉は、大屋根で一体化され、巨大な建物と化していた。老朽化ひどく、抜本的な改修工事が必要であった。

第一期（2007年8月-2008年5月）西ノ宮文具店と玉澤家住宅の改修
通りに面した町家2棟を全体から切り離し、ファサードの修復、基礎の新設、階高の復元、構造補強をした。
（文化庁町並み保存事業助成金対象事業）

第二期（2010年7月-12月）土蔵と洋館の改修
土蔵と洋館を全体から切り離し、洋館は足家として土蔵との距離をとった。原型がわからず、修復は困難を極めた。
（文化庁町並み保存事業助成金対象事業）

東日本大震災で被災 2011年3月

第三期（2012年1月-9月）震災被害の改修、倉の改修、中庭、各棟の内装。
建物群をつないでいた大屋根を撤去し、中庭を作る。倉を改修し、西の宮母屋と張り廊下でつなぐ。甘味処、物販、ギャラリー、防災備蓄倉庫とする。
（東日本大震災復興 経済産業省 地域商業活性化支援対象事業）

所在地 千葉県香取市佐原イ511	寸法	外部仕上げ
主要用途 店舗、ギャラリー	総高 7150mm	屋根 瓦葺、ガルバリウム鋼板葺(倉)
建主 しゅはり	構造	銅板葺き(張り廊下、母屋足)
設計・監理	主体構造 木造	外壁 杉下見板張り、漆喰(土蔵)、 トイソ下見板張り(洋館)
建築	工程	開口部 木製建具(ヒノキ)
担当/部福美、遠藤敏也、本名瀬佳世	・西の宮母屋および玉澤家住宅 歴史的町並み修繕工事	内部仕上げ
監 岩城	設計期間 2007年7月~2007年5月	西の宮母屋および倉(喫茶)
担当/荒川淳良	施工期間 2007年7月~2008年5月	床 1階 モルタル盛土フ、 2階 畳敷
施工	・土蔵および洋館 歴史的町並み修繕工事	壁 クロス
建業	設計期間 2010年1月~2010年4月	天井 スギ 野地床現し
しゅはり	施工期間 2010年6月~2011年3月	土蔵(ギャラリー)
担当/岡野和弘	・震災による建物修繕および全体内装	床 モルタル
建築 電気 永野電気	設計期間 2011年10月~2011年12月	壁 クロス
担当/大橋康雄	施工期間 2012年3月~2012年8月	天井 スギ 野地床現し
規模		
敷地面積 378m ²		
建築面積 喫茶 西の宮母屋 56.9m ² 、倉 83.85m ²		
洋館 玉澤家母屋 33.67m ²		
洋館ギャラリー 10.58m ²		
土蔵ギャラリー 26.84m ²		
延床面積 喫茶		
西の宮母屋 100.71m ² 、倉 120.69m ²		
物販店 玉澤家母屋 29.57m ²		
洋館ギャラリー 10.58m ²		
土蔵(ギャラリー) 26.84m ²		
階数		
土蔵2階		
階数 2階		

■いなえ（旧西の宮家）改修前



改装前平面図

明治から昭和初期にかけて建てられたここは、改装前、西宮文具店の店舗、倉庫、従業員の住宅として使われていた。通りに面した町家2軒、洋館、土蔵、倉庫の5棟が増改築を重ねた結果一体化されており、構造や動線が複雑に絡み合った巨大な内部空間を形作っていた。建物の隙間には大屋根がかけられ、中庭はなかった。

母屋は重機が入るようにかさ上げされており、軒は切られ、看板建築となり、伝統のかけらも感じられない建物であった。かなり老朽化が進んでおり、原型がわからない状態だった。



外観 かさ上げされた母屋、軒が切られ看板建築に。



傾びたトタン製の側面外観。



各建物の間には大屋根が掛かり中庭はなかった。



母屋2階。内部は暗く、閉鎖的だった。



洋館、蔵、倉庫が一体となった巨大な内部空間。



倉庫、蔵の内部は、迷路のように入り組んでいた。

■第1期工事（2007年～2008年）

旧西の宮家主屋、旧玉澤家改修工事



第1期工事平面図

■通り沿いの2軒の町家を切り離し、町並み側、中庭側それぞれに外壁、軒を再生した。
 ■香取市佐原地区町並み保存事業補助金対象事業
 文化庁補助金対象（建物の骨組みと外観）

- ・一部解体・看板建築撤去
- ・付属建物・外部階段除却
- ・基礎新設
- ・西の宮 建物を0.8m下げる（復元）
- ・柱梁の補強、垂木・野地板補修
- ・通り側、中庭側下屋復元
- ・外部建具枠周り、格子戸、ガラス戸新設

〈通り側外観修景〉



通り側の改修前外観。



〈中庭側外観修景〉



西の宮 改装前母屋を中庭側から見る。



増築部、倉庫を解体する。



かさ上げされていた階高を下げる。



母屋と倉庫、増築部を切り離す。

■第2期工事（2009年～2010年）

土蔵、洋館復元工事



第2期工事平面図

■土蔵と洋館を全体から切り離し、洋館は足家として土蔵との距離をとった。
原型がわからず、修復は困難を極めた。

■香取市佐原地区町並み保存事業助成金対象事業
文化庁補助金対象（建物の骨組みと外観）

- ・付属建物除却、土蔵増築部分除却
- ・基礎新設、洋館足家
- ・柱梁補強、腐食部の差し替え
- ・屋根全て葺き替え
- ・外壁復元（洋館・ドイツ下見、蔵・漆喰）
- ・外部周りの建具枠周り新設
- ・土蔵 漆喰戻復元



母屋と洋館の間を切り離した後。



増築部を壊しながら洋館を切り離してゆく。



洋館とつながる土蔵。裏側から見たところ。



土蔵内部は、暗闇で埃にまみれていた。



洋館を足屋して土蔵から離す。

〈洋館復元〉



基礎、骨組みを新しくする。



地域の類似例を調査し復元。



〈土蔵修復〉



増築部分を撤去した後の土蔵。



基礎、構造部、漆喰壁、老朽化がひどい。



ジャッキアップして基礎を新設。



しっくりの補修、屋根吹き替え、下屋底をつけ、漆喰戻修復。

■東日本大震災被害 (2011. 3. 11)

千葉県香取市佐原伝統的建造物群保存地区は、利根川の下流域に位置するため、東日本大震災により、多数の町家や土蔵で屋根瓦の落下や漆喰壁の崩落などの被害があった。改修途中の「いなえ」(旧西宮家)、カフェ「しえと」、「しゅはり」「千与福」も震災被害を受けた。



震災時に瓦が崩落した佐原の町並み。



地盤の流動化で砂が吹き出す小野川。



いなえの土蔵の漆喰壁にもひびが入った。



しえとも被災して休業となった。現在修復中。



小野川の石積が一部崩壊した。

伊能忠敬旧宅も...佐原の伝統的町並み、被害深刻

東日本巨大地震で、千葉県香取市佐原地区の伝統的な町並みなど、県内の国指定等文化財で39件の被害が生じていることが、県文化財課の調査でわかった。

同課によると、佐原地区は屋根瓦が落下するなど町並み全体が被害を受け、最も深刻だという。

佐原地区では、屋根瓦を土で木材に接着^{どぶ}する「土葺き」の建物があり、伊能忠敬が暮らしていた国指定史跡の旧宅も瓦が落下。ブルーシートで屋根を覆う家屋が何軒も見られ、店を閉めている商店も多い。

約20年前から同地区の町並み保存活動に取り組むNPO法人「小野川と佐原の町並みを考える会」の高橋賢一理事長(65)は、「活動が10年くらい前に逆戻りしたよう」と落胆。「本格的に修理した建物は深刻な被害を受けておらず、修理方法を検証し町並みを修復させたい」と話す。

このほか、旭市では国史跡の「大原幽学遺跡旧宅」で敷地の地割れや^{しっくい}地盤沈下を確認。「旧堀田家住宅」(佐倉市)では壁や土蔵の漆喰が入り、「法華経寺法華堂」(市川市)では、天蓋飾りの一部が落下した。

(2011年3月23日06時51分 読売新聞)



屋根瓦が落下するなどした香取市佐原地区の伝統的な町並み=千葉県文化財課提供

■第3期工事（2011年～2012年）
倉庫改修工事、造園工事



第3期工事平面図

■増築部を壊し、中庭を創る。倉庫の小屋根と構造の一部を利用して飲食店とし、西の宮母屋と渡り廊下でつなぐ。

町家、洋館、土蔵の空間設計をし、物販、ギャラリー、防災備蓄倉庫、コミュニティスペースとする。

■東日本大震災被害の修復、被災地の復興拠点の設計
地域商業活性化支援補助金対象事業
(経済産業省 被災地の復興支援)

- ・ 不要な付属屋の除却
- ・ 倉庫部分基礎新設、構造補強、再建、
- ・ 外壁、建具新設
- ・ 倉庫と旧西の宮接縁渡り廊下新設
- ・ 各箇所内装工事
- ・ 土蔵 震災による外壁、漆喰修復
- ・ 中庭造園工事
- ・ 家具、ブラインド・厨房機器などの備品



増築部が撤去された直後の倉庫側面。



倉庫の一部を解体後。



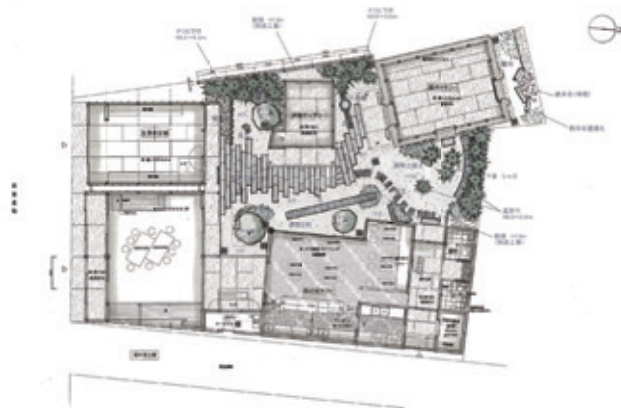
小屋組だけが残る倉庫。



小屋組以外、全て新しくする。改修完成。

■中庭の創出

■建物を分離して中庭を創る。違う時代に建てられた、様式も違う各々の建物、それらのつくり出す空間が、遺構のように重なり合う、歴史の奥行きを楽しむ空間を創った。



増築部を壊して中庭を作る。



使える瓦を積んでオブジェを創る。



庭の基礎石を敷き、植栽を植える。



佐原の震災復興の拠点としてよみがえることになった「いなえ」に、地元の人にも、観光客の人にも、気軽に立ち寄って欲しいと思った。そこで、再生した軒下空間を利用して、柔らかい公私の関係を作ることとした。町からは入りやすく、店内では、表の雰囲気を感じながら、ゆっくりくつろげる。格子でプライバシーと防犯を、ガラスで温熱環境を制御する。境界を一枚の壁やドアで仕切るのではなく、複数の可動のフィルターで仕切ることで、時間や季節によって変化する柔らかい境界が生まれた。!



1. 軒下空間の再生

—旧西宮家母屋をカフェ付属のコミュニティスペースへ—



改修前の外観



改修前の内観

改装前、通り沿いの町家2軒の軒は切られ、階高もかさ上げされており、閉鎖的、威圧的なファサードだった。また、老朽化ひどく、抜本的な改修工事が必要であった。そこで、佐原の伝統的な軒下の形にちなんで軒下空間を再生し、町と建物の関係を修復することから設計を始めた。通りに面して格子をつけ、半間内側にガラスを設けた。



2. 奥行きを創出

—旧西宮家母屋の裏に中庭を設ける。—!



裏の建物を解体し、中庭を作った後、底側の外観も修復、軒下も再生し、中庭と母屋の間隔も柔らかくつないだ。!



格子のむこうに透けて見える、!
もう一つの世界がある。!
中に入りたい、そんな気持ちがある。!
人の心を動かす町並みを作りたいと思った。



改修前、通り沿いの町家の裏に巨大な倉庫が増築されていた。それらを解体することで中庭を作り、奥行きを創出した。格子から透けて見える緑が、町行く人の心に語りかけ、優しく引き入れる。!



旧西の宮 母屋店舗改修前内観



3. 透明なミセ

—旧玉沢家を佐原特産物販売店に改修—

旧玉沢家住宅は佐原特産物販売店コーナーとして使われることになった。そこで、軒下空間を再生し、かつ、通りと建物の間をできるだけ透明にした。後ろに中庭が控えているため、奥が明るく、みせの奥行きが深く見える。みせ空間そのものが、ショーウィンドウになり、おもわず中に入ってみたいくなる設計をめざした。



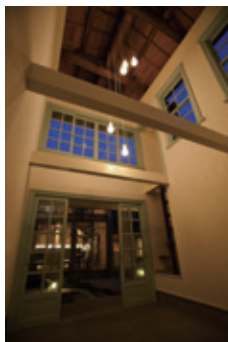
裏側の外観、軒下も再生した。



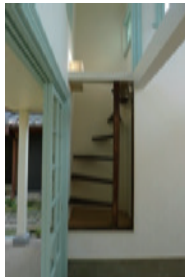
改修中の内観。増改築の結果、中庭はなくなり裏側の軒も切られていた。

4. 記憶の再構築

—洋館を 時間のギャラリーに改修—



増改築の結果、原型がまったく解らなかつた洋館を「修復」するにたがって、全ての記憶を隠して、新しく仕上げてしまうことに抵抗が生まれてきた。そこで、古い小屋組の下端に額縁をまわし、「記憶を見る窓」として残すことにした。そして、そこに螺旋の時間を表すかのように、照明を垂らした。また、既存の螺旋階段も原型のまま残した。見る人の心が螺旋の時間をたどって、過去と未来に旅することを願って。



思い出は、いつの間にか形を変え、その前後の記憶と溶け合う。この大正期に建てられた洋館もやはり、そうだった。度重なる増改築を繰り返し、原型をとどめず、他の建物の溶け合っていた。改修にあたっては、その思い出を解きほくしながら、骨組みまで戻し、再構築した。この作業を、改修なのか修復なのか、よくわからなくなった。！新しく作られた思い出の形は、新しい命を得、未来の歴史を重ねて行く。



母屋から切り離された洋館は土蔵とも倉庫ともつながっていた。倉庫を解体し、土蔵から離すのに足置し、修復した。



改修前の蔵は、増築を重ねられ、洋館や倉庫と一体化していた。老朽化もすすみ、その外型も定かたでなく、内部は埃にまみれ、闇に包まれていた。少しずつまわりの建物を解体し、蔵の原型が見えてきた頃、ぽっかり空いた裏口から光が射しこんだ。そこには、時間から置き去りにされた、懐かしい蔵の風景があった。その時感じた感動を風景を大切に蔵の設計を進めることにした。



増築部から切り離れた後の土蔵の外観。基礎を新しく、腐った構造物を入れ替え、新しい外観、扉を新しく作った。



溶れた土蔵の基礎石を使って、石置をつくり、中庭に思い出を残した。時代に覆れた石は、空間に柔らかさを加えてくれた。!



築城の趣:
裏口から見える庭は、基礎石が散乱した遺跡のような風景をそのまま残した。彼岸花の球根を石の間に散らした。秋に赤い花の風景が現れる。

歴史の時間への入口



5. 歴史と現在

—土蔵を歴史のギャラリーへ—

宵舟りになった時間!

元々あった2階の床は撤去し、吹き抜けとした。そして、解体の時、見つけた倉庫の重鉛鉄板製の扉を逆さにして、吊り下げることにした。直接手に触れられないけれど確実にそこにある、歴史の時間を楽しむ為に。





倉庫の屋根と骨組みの一部を残し、カフェを作った。庭と一体化したこの開放的な空間は、中庭にちりばめられた古建築や古瓦など、歴史の時間を楽しむ場所になる。天井を見上げれば、倉庫の古い小屋根も楽しめる。2階は、防災倉庫として、地域の防災拠点とした。!

! 別の建物に寄りかかるとして建っていた倉庫は改修工事を進める中で、母屋、洋館、土蔵と切り離していくと、構造的に成り立たなくなると、屋根以外のほとんどの構造材は、新しした。また、老朽化が進んでいたため、ジャッキアップして基礎もやり直した。開放的な空間を確保する為、角にコンクリート柱を建て、構造補強をした。!



6. 骨組みを生かす

—倉庫をカフェと、防災倉庫へ改築—



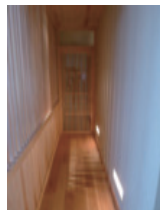
解体前の倉庫内観。



母屋と切り離す。



屋根を半分壊す。



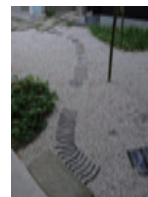


明治の町家、土蔵、大正の洋館、昭和の倉庫が積み合っ
て建つこの場所には、様々な時間や記憶が折り重なって
堆積していた。そこで、いろいろな時代の遺構が重なりあう
イメージで、中庭に記憶の風景を作ることにした。古い土蔵
の基礎石で敷石を作り、その狭間に古瓦を置き、時間の流
れを感じるようにした。



7. 時間をつなぐ

—折り重なる時間の景色を楽しむ中庭—



這樣的イメージ
無暗なく建っている不思議な住棟
配置に呼応して、不整合な軸線を
感じられる庭のデザインとした。



改築前、中庭はなかった。!
大屋根で覆われていた。



東日本大震災後の香取街道沿い(伝統的建造物群保存地区)。



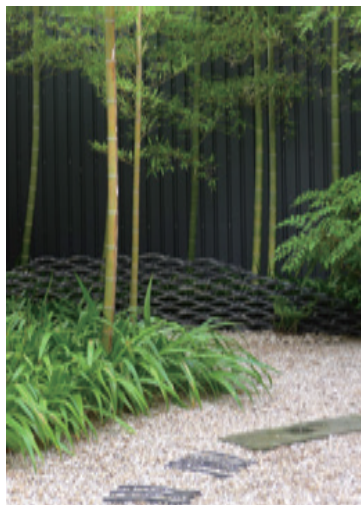
崩壊した瓦がゴミとして積まれていた。



使える古瓦を選んで、みんなで試作を作った。



45%年3月11日、東日本大震災により、佐原は大きな被害に見舞われた。多くの建物の躯体に歪みやヒビが生じ、ほとんどの屋根瓦が崩壊した。工事中の「いなえ」も被災した。震災で落ちた古瓦を見ているうちに、それらをそのまま捨ててしまうのではなく、何かの形で建築に取り入れることで、人々の目に残るようではないかと考えた。古瓦の表面には、長い歴史の時間の中でついた音が独特のテクスチャーを作り、それ自身が芸術作品のように美しく、手焼きで一枚ずつ焼かれた古瓦には、現代の瓦にはない深みがあった！



瓦のすけた感じが夜屋、違う表情を見せる。



8. 記憶を残す

既存建物の、埋もれていった美しさを発見し、強化する。その見え方を変え、価値の転換をする。それは、「建築することと同じではないかと思うようになった。！建物の記憶、場所の記憶、古家が見てきた時間&。！歴史の堆積を感じる思い出の種を発見し、新しい命を吹き込む。！



改装前の倉庫の外壁のタン板が、錆びて美しくなった。使い場所を考えた結果、母屋にトタンの床の間を作ることで、場所の記憶を残すことにした。それを見て、オーナーも、職人も、地域の人も、皆びっくりし、喜んでくれた。！